

6 中 世

鎌倉、室町、戦国時代をひとまとめにして中世といいます。中世のことは日本だけでなく、世界のどの国でもくわしい歴史がわかりません。記録が少ないからです。八代でもそのとおりです。それで安土桃山時代に書かれた記録をよりどころにして八代のようなすを見ましよう。

人々の暮らし
鎌倉時代、室町時代の八代

の人々がどんなくらしをしてきたか、私たちはそんなことも知りたいのですが、よくわかるように書いたものはいつかありません。見つからないのは、字が書ける人が少なかったからです。書ける人でも、日常生活のことはあたりまえのこととして、大切な紙を使ってまで書くことはしません。

ここでは戦国末期までの言い伝えを書いた記録から人々の生活をさぐってみましよう。

八代山に
戦国時代になる前でも、いつ

戦いがおこるかかわからないあ

りさまでした。土豪たちは小高い山に砦をつくって戦いにそなえます。名古屋、景福寺山、男山にもつくりました(↓64P)。八代山にも井手宗考(↓67P)がつくって頑張っていました。いま行者堂のあるあたりでしょうか。村びとたちは自分たちの土地を守るため団結し、砦をつくるのに一生懸命はたらいたことでしょう。『英城記』

東光寺が 文明十六年(一四八四)冬、但馬

まる焼け から攻め込んできて播磨を占領

していた山名氏に対し、京都にいた赤松氏の一族の浦上則宗が播磨にはせ帰り、八代付近で戦いました。時は同年二月のことで、そのときの戦争で東光寺がまる焼けに

東光寺焼ける

くわしくいうと、播磨を占領した山名氏を、京都にいた赤松氏の一族の浦上則宗が播磨にはせ帰り、八代付近で戦った。時は同年二月のこと。

なつたと『天隠語録』に書いてあります。

八代が戦場になつたのです。これは想像ですが住民はまきぞえにあり、ひどいめにあつたことでしょう。家を焼かれたり、米も略奪されたかもしれません。

東光寺山へ 電気やガスがない昔は、ごは下草かりに んをたくにも風呂をわかすにも山の木の下に生える下草をつかいました。下草はまた田に入れるだいいじな肥料でもありました。

そこで東光寺山へもことわりなく近くの住民が刈りに行きました。隣の芝崎山など村の共有林の下草だけではたりなくなつてしまつたからでしょう。

そこでこの地方を支配していた城主、當時置塩に城を構えていた赤松政則から調べをうけました。八代の人だけでなく伊伝居の人も、芝村（所不明）の人です。この記録は67Pにあるからそれを見ましよう。室町中期のことでした。

『東光寺文書』

墓を建て始める

東光寺山霊苑には墓がたくさんあります。年号を

見ると江戸時代中期以後のものが多いのです。けれどもピラミッド型にして祭つてある榑原家臣たちの墓の横の崖上に、小さな五輪塔が十基ほどと、両手を膝の上で組んだ阿弥陀如来の石仏が一基あります。年号はないが広く他の地方の石仏と比較研究すると、これらの五輪塔や石仏は室町中期から戦国期に作られたものということが分かつています。したがって東光寺山霊苑のこれらの石仏もその頃のものであり、この頃から墓を建て始めたということになります。文字が書いてないので誰の墓だか分かりませんが、おそらく有力者の墓なのでしょう。

総社の祭に出る

総社は姫路の中心になる神社でした。今も「一つ

山」、「三つ山」祭が行われていますが、この祭りは、大永二年（二五三）播磨の守護赤松義村が始めました。ところが義村はそ

『天隠語録』

京都・建仁寺の天隠和尚の言葉や詩を書いたもの。

の前の年にも盛大な祭りを行っています。神財練に姫路付近の十六カ村から千五百人、八代からも六十人出たというのです(↓67P)。

神財とは神様の物で総社でたいせつにした物というのでしょうか、または神輿の書きちがいなのでしょうか、よくわかりませんが、とにかくおおぜい動員されました。

史料のつづきに書いてあることですが、農長は「かりさん」や長羽織を着て長棒を持ち、農民をしたがえ、村の子供たちは鉦を鳴らしながら、おはやし歌をうたうというのです。子供たちは鉦の打ちかたや、おはやし歌の練習をしたことでしょう。

短羽矢明神 村の団結がかたくなると、をまつる 村ごとに神社を造るようになります。南八代には短羽矢明神と大歳社の二社できました。

短羽矢明神には神功皇后が麻生山から射た白羽の矢を祭るといわれているので戦の神です。「地主神なり」(播路巡考聞書)と書いてありますから、八代の方がよほど前から

おまつりしていたのでしよう。

また

「短羽矢 赤松家 後 小寺豊後守再興

大工 阿閉藤原宗之」 『神社歌寄』

とも書いてあります。赤松家とは播磨の守護、小寺豊後守とは赤松家の分家で家臣であった小寺景重のことで、十四世紀から十五世紀にかけての室町幕府三代將軍足利義満の頃の人です。武将であるこの二人も、この短羽矢明神を厚く信仰し、武運長久を祈って社殿を再建したのでしよう。

この記録のとおりだとすると、社殿を初めて建てたのは南北朝時代ということになります。姫路短大の南西の新在家中の町に矢落という地名があることも今後の参考にしておきましょう。

大歳社をまつる 素盞鳴命の子だという大歳(おほとせ)の神(穀物の神)をまつ

っています。この社に関して「小寺藤兵衛建始める」(「神社歌寄」と書いてあります。

小寺藤兵衛とは前に出てきた小寺景重の

村の始まり

わが国では十四世紀後半、南北朝時代から村のまとまりがで始める。八代は短羽矢明神を中心に村の政治が始まるようだ。

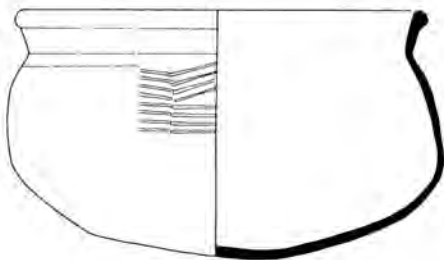
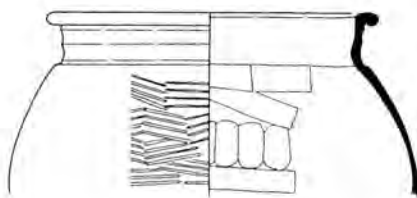
子孫です。四代にわたって藤兵衛を名のつたので、どの藤兵衛だかわかりません。ただいえることは室町中期から戦国時代の間です。

小寺氏は短羽矢明神があるのに大蔵社も建てました。南八代の豪族とも相談してのことでしょう。戦いがおれば勝てるように、ふだんは穀物がよく実って領内が豊かになるようにと祈ったのでしょう。

ありきさん 文禄四年（一五九五）、ときの姫の給料 路城主は木下家定（秀吉の妻の

兄）で、八代は芥田五郎右衛門宗久が代官となつて支配し、政所（役所）もありました。その政所に「ありき」さんをやとっていました。「ありき」とは「あるき」のこと、郵便も電話もない時代には役所からのおふれは、この「ありき」さんがまわって伝えていました。

その政所の「ありき」さんの給料が一年に米二石一斗でした。（『芥田家文書』）。今の米代にすると約九万四円です。



土なべ 『有年考古館蔵品目録』

東光寺山で二つみつかっています。松岡土器を採集 秀夫の採集品で、二つとも土ナベです。その一つには表面にススがついて、実際に、これにてたきしていたことがわかります。有年考古館にあるので、いちど見てください。四百年以上も前の人が使っていた物がわかります。

この山に、こんな土器が見つかったのはなぜなのか、不思議です。骨壺として土に埋めていたのでしょうか。

二石一斗

今の米の値段になおすと

政府米 玄米三〇kg 八、四一四円

（九一年 現在）

一石は約一五〇kg

二石一斗は約三二五kgとなる

八、四一四円の二〇・五倍は

九二、五五四円

中世の城

姫路市内に中世の城は約七十あったことが分かっています。そ

のうち八代には芝崎山構居と千代山構居と横須賀構居がありました。芝崎山構居はその名から、姫路短大の北の芝崎山にあったと思われませんが、千代山構居、横須賀構居の場所は、まったく分かりません。この三つは戦国時代の終わりごろ、十六世紀に造られた構居です。ところが、これより百年前に八代山にも男山にも構があったことが分かってきました。次のその研究を紹介しましょう。

男山の構

男山構考

松岡秀夫

男山に城があったことをご存じの方は少ないと思う。

……(中略)……

永享十二年(一四四〇)赤松満祐は瀬戸内海を防備するため、播磨各地の城主に出勤を命じたところ、男山構主山野新藤次成明は那古山構主や嵐山(景福寺山)構主らと合

議してことわつたため、砦を没収されるという事件があった。

この赤松満祐も嘉吉の乱で滅亡し、播磨は山名氏の支配下に入り、男山の構には山名持豊の臣畑七十郎が居住して守りについた。

康正元年(一四五五)英賀城主三木通武は山名氏にそむいて兵を挙げ、男山・那古山等の要害を攻め落とし、これを守つた。

天正八年(一五八〇)羽柴秀吉に攻められて英賀城が陥落したが、その前に男山構も秀吉に攻略されていたことが考えられる。

以後男山には城は築かれなかつたようである。(『コミ姫路』14)

柴(芝)崎山城

『兵庫県の中世城館』県教育委員会発行より転載

永享十二年(一四四〇)赤松満祐の下知を拒んで閉戸追放になつた姫路の豪族のうち八代山構主井出宗考沙弥というものがいる。八代山と柴崎山を同一とすれば、柴崎山に最初に構を築いたのは井出宗考という

八代山の井手宗考(↓67P)

この人も出勤をことわつた。

『村翁夜話集』英城記

松岡秀夫 八代本町二丁目

眼科医 前 有年考古館長

八代付近の小さな城

『播磨鑑』によると次の三つ

芝崎山構居 構主 八代道慶

千代山構居 構主 尾上十三郎

(小寺氏の配下)

横須賀構居 構主 小寺主馬助

『播磨巡考聞書』には一つ

八代構 所は八代葦原、構主は八代

道慶

ことになろう。

八代六郎左衛門道慶は八代家の祖で享祿四年（一五三二）小寺則職が御着城に移ったあとの姫路城の留守居をしていた人である。……天文十四年（一五四五）黒田職隆と交代したのち八代構に住んだという。……

八代山の頂上に岩盤が露出し石塁の形をしている。岩盤を掘り下げた井戸がある。その下にも15m×7.5mの平坦地があり、東斜面の下にも14m×15mの平坦地がある。ここにも外側に巨石が、立てた形に並んでいて石塁の形を示している。

八代の地名 八代、この地名がどういうわけの起こり けでつけられたのか私たちは知りたいところです。昔の人もそう思っていました。ここではそのことについて書いた本をいくつか見ましょう。

いちばん古い本は次の『英城日記』。これは八十一才の老人が、それまでにあった本が戦乱で焼けてしまったので、いちど読んだことを思いおこし、まとめた本です。

『英城日記』 卷之下 天正十年（一五八二）八代村 英賀葉師入道定定 著

（永享五年）八月四日 生松原ニ一夜ノ中ニ松三十本折タリ 即井出村边上師村占者道海ヲ居占セシム 此道海ハ道満ノ流ヲ汲テ八代此所ニ住シ術甚神也 即占メ日近日 異形ノ者來ルヘシト 果シテ此一頭三支ノ熊出タリ 依之（これにより）十月十日占者ヲ居 通重耳心ノ余リ居所ヲ一村領セシム 八世ノ占者ナレハトテ八代村ト号（なすく）

読みにくく、わかりにくいところがありますが、その文意は

「占を業とする有名な家の八代目の道海という人が、城主の通重からこの地をもらって住んだので、八代村と名づけた。」

ということです。それは室町中期の永享年間のことです。

次は江戸中期にできた『播磨鑑』。この本は播磨の中のいろいろなことを書いた本です。分かりやすく書いてあるので、まず読んでみましょう。

英城日記

英賀城の歴史の本。写本が二種ある。播磨鑑の付録の中に「三頭三支の熊」の項に八代のいわれが、もう少し分かりよい文で書いてある。

★耳は「其」の誤りか

宝曆十二年（一七六二）

『播磨鑑』

大蔵社

印南郡平津村 平野庸脩 著

当社は素盞鳴尊の御子也、大蔵尊と申したてまつる。里俗の説に「われは大蔵大明神なりわれ宿らん所は必ず繁昌して八千代をもふべし」ついに一の社を建て うやまいたてまつる。かの御神託に八千代をも守らんと のたまいしを中略して八代と名づくるとも申す。また初めて社を建てたてまつりしゆえ 里の名とするともいへり。

八千代の千を略して八代、また社やしろから八代と、この二つのいいたえがある、ということです。

次は

『兵庫県飾磨郡誌』 昭和二年 庭山真綱 編
八代

この地の起名に関し、地名辞書には

「いま姫路の西北なる八代の地は播磨風土記飾磨郡の条下に見ゆる大三間津日子命すなわち孝昭天皇のいたまいし地にして、八代は屋形の地名にのこれるにあらずや。」

等いたれど、天皇の宮居したまいし地は同じ城北村の大字平野にして、同地人見塚の辺りならんとの説あり、今に地字飾方という地あり、八代の起名は必ず他にあるなるべきか、屋代が多く神社に関係あるより、これもまた社の義のあらじか等おもわるれど確かならず、なお考うべし。

『地名辞書』にある「天皇の屋形があったから八代」というのは誤りで、神社―屋代―八代”となつたと思うのだが確かでない、なおよく考えてみないといけない、ということです。

八代の名の起こりについては、昔からいろいろ言われてきましたが、はっきりした答がない、ということが分かりました。26Pで見たように、他の地方の八代は神社に由来するところが多いのを見ると、これも一つの参考になるでしょう。

八代の名 八代という地名が出てくる最初のはじめ の記録は室町中期、永享十二年（一四四〇）のもので、それは『村翁夜話』

『集』に収めてある『英城記』に記されているもので

八代山居 井手宗考沙弥

と書いてあります。八代山は今の行者堂のある芝崎山のことでしょう。そこに井手宗考という土豪が砦をつくっていたということです。沙弥とは、出家しているが普通の生活をしている人のことです。

次に古いのは延徳元年（一四八九）のもの。

『東光寺文書』

東光寺山内尾崎府山を三ヶ村として乱入

下草数年かり取申乱 今度置塩様より御吟味

(以下略)

延徳元年

三月二日

東光寺様

しば村 政所 源左衛門

出井村 庄屋 惣太郎

八代村 庄屋 新左衛門

次に古いのは大永元年（一五二二）、五月五日 総社の祭に参加した人数を書いた記録

です。

『惣社集日記』

神財練十六村民千五百人

平野村 六十人出

大野村 五十人出

白国村 百人出

野里村 五十人出

八代村 六十人出

農長 小室七左衛門

同 菅原五郎兵衛

政所 白国 彦八

農長 野里五郎次郎

同 室住 平六

名主

以下略

というように戦国時代、十五世紀にはいると八代の記録がでてきます。このほかにもかなり残っていますが、それらの記録は次の項に書きました。それらを見ると八代の様子もおぼろげながら分かってきます。

八代を古書 八代が本にでてくるのは戦国から見ると 時代のおわり頃からのことで

す。次の人々が書いた本が残っています。

これらの本は、題目からもわかるように、広く姫路付近のことを書いている中に、八代のことも書いているという本です。した

延徳元年の記録

三か村から東光寺へ出した古文書を江戸時代に写したものを。

置塩様 置塩城を根拠地として播磨

を支配した赤松政則

しば村 不明 芝村とも書く

出井村 今の伊伝居

『惣社集日記』

天正九年（一五八一）榎村長之の著。惣社の古記録から大切なところを、抜き書きしたもの。

がつて簡単に書かれているので、わかりにくいくところがあります。

それで後に、これを見た人が、かなり説明を書きたしています。ここでは、その部分を削り、もとの文だと思ふところだけを

ぬきだしました。

読みやすいように、や。を入れ、今の字にもなおし、分かち書きにもしています。(以下『播陽万宝知恵袋』臨川書店刊による)

(原文)

播州古所伝聞志 天正二年七月七日 蓬香亭 芦屋道考 著

一、大永二年八月 姫路執人 八代六郎左衛門道慶 領中大歳社にし

て國中祈願。

(解説)

芦屋道考 天正ごろの人。くわしいことは分からない。

八代六郎左衛門道慶 (↓65・72P)。

播磨府中めぐり 天正四年四月七日 芦屋道海 著

(桜木山)の北半丁ばかりに、たんばやの御社あり。神体は白羽の矢と申し伝う。麻生より神后尊、御一の矢射たまいしなり。このこと不審。今八代村の地中岡といふ民家六十斗、此所に短羽矢明神をまつる。また大歳明神を別社にまつる。

いもせ山は長彦山という。少彦名の作れし姫山に對しけるか。長彦山東に、わかれ女の岡あり。

八代王院の馬場 萱尾江の西に今かた残り。岸にあり。西城戸より五丁ばかりにあるるり寺はいにしえ勅願寺、六丁の地方、柳の清水はかやを江にあり。

王院の馬場 場所不明。

六丁の地方 六丁四方のこと。

柳の清水 場所不明。

芦屋道海 陰陽家芦屋道満十世の孫という。古い業で英賀城

主、三木氏に仕え百五十石どり。英賀敷内にいたが落城後、三宅に住む。

神后尊 神功皇后のこと。

わかれ女の岡、るり寺 (↓73P地図)。

長彦山東に、わかれ女の岡あり。

八代王院の馬場 場所不明。

萱尾江の西に今かた残り。岸にあり。西城戸より五丁ばかりにあるるり寺はいにしえ勅願寺、六丁の地方、柳の清水 場所不明。

柳の清水はかやを江にあり。

角明神、城戸の北にて、八代の南に当り大木あり、此所のよし今は木のみ残れり。

国衙巡行考証 天正六年八月三日 耆求堂 芦屋道建 著

一、姫山 国衙庄内、八代中の村にかかれり。東西五丁ばかりの山なり。

一、二四社 姫山には刑部社、天満の社あり。角の社は城の戌亥、八代の大木の下まつる。

一、鷺山の城に鷺の清水三間四方あり、名水。八代の地内なり。

一、八代の地内 城より北、後裏、下馬の前までなり。

一、また短羽矢の社 安室郷にありといへど、八代地に崇祀せり。

一、別れめの岡は長彦山の東にあり。いか成由緒と見えす。王院の馬場 その名高し。萱生西にかた残れり。

神社歌寄 天正六年七月二十日 永良芳泉 著

一、短羽矢 赤松家、後小寺豊後守再興。大工 阿閉藤原宗之。

一、八代大歳社 小寺藤兵衛建始ト云々。

めさまし草 天正七年七月七日 永良鶴翁 著

一、いもせ川の辺りより猿田の社のうしろ、北は二また川の南ぎわ南方、今の西城戸より南北五丁、東西五十丁ばかり、その

この本は道建が、伯父道海の『播磨府中めぐり』を持って、

国衙周辺を回り、もれていた所を補ったもの。

芦屋道建 道海の甥。父は占いを業とし、英賀城主に仕えた。

姫山 男山の北斜面が今も八代であるのと同様、姫山の北斜面も八代だったのか。

角の社 江戸期の加筆では「今中嶋の木これなり社なし」と書いてある。中嶋は坊主町白川神社の南方。

鷺の清水 今の清水門にある。発掘調査され、井戸やかたが復元してある。このあたりも姫路城ができるまでは八代だったことがわかる。

萱生西 萱尾江の誤りでなからうか。

永良芳泉 神崎郡鶴居の人。

永良鶴翁 芳泉の一族か。

猿田の社 総社の撰社。県立博物館のあたりにあった。八代の範囲は、坊主町をふくめてこのあたりまでだつ

の範囲は、坊主町をふくめてこのあたりまでだつ

中に姫路八代民屋まじゆ。

たようだ。

播州巡考聞書 年月不詳(天正八年以後) 芦屋道海 著

一、八代構処は八代萱原の地なり。およそ千貫ばかりの領中なり。 八代構、萱原 場所不明

短羽矢明神は地主神なり。

芥田家文書 野里の芥田五郎右衛門は姫路

から見ると 城主木下家定の代官として八

代を治めたことは前に書きました。その当

時の記録から八代の様子を見ると

1、八代の高は六六二石二斗七升八合、つ

まり一年に八代から、これだけの米が

とれるというのです。いま仮に一反に

一石五斗の米がとれたとすると、当時

八代には四十四町歩余の田があり、一

石三斗だとすると五十町歩あったとい

う計算になります。

また一戸が五反を耕作していたとする

と九十戸ないし百戸の農家があったこ

とになります。

2、河間町も八代の一部だったようです。

天正十五年の木下家定書状に

八代帳はつれ川間町之事

但、どのみそをきり寺町のうらまで

合式拾五石者 (以下略)

と書いてあります。

また別の書状には「八代の帳面から

川間町の方がおちている。書き加えて

差し出すように」といっています。

河間町は木下家定の時代から城下町

になったようですが、年貢はこれまで

どおり八代の帳面に書いておくように

というのです。河間町での米のとれ高

は二十五石です。

このようなことから以前の八代は、

東は河間町までだったことがわかります。

別の書状には次のように書いてある

「尚々能々入念候而、可改之事

肝要ニ候 以上

八代帳はつれ川間町之事、その溝

を切、寺町之うらまで申付候間、

急度撰削仕、帳を作可上候……

(天正拾五) 十月二八日 家定

地図に書い 天正年間に書かれた前項の本
てみると の内容をわかりやすいように

と、江戸時代の末に書いたのが次のページ
の地図です。筆者は誰だかわかりません。

姫路城外濠や野里八丁など江戸時代の地名
も入れ、天正時代との関係が分かるように
してあります。『中古往還』など、その人の
研究結果もいれてあるので、なかなか興味
ぶかい地図です。

八代はもつと 中世の八代は今よりもつと
広がった 広がったようです。それは
南東のほう、今の県立博物館のあたりまで
だったように思われます。そう思わせる記
録を前に見ましたが、もういちど抜きだし
て整理してみました。

一、 姫山 八代中の村にかかれり (↓69 P)

一、 鷺の清水 八代の地内なり (↓69 P)

一、 八代地内城より北 後裏 下馬の前まで
なり (↓69 P)

一、 いもせ川の辺りより猿田の社のうしろ、
北は二また川の南ぎわ南方、今の西城

戸より南北五丁、東西五十丁ばかり、

その中に姫路八代民屋まじゆ (↓69 P)

一、 八代帳はづれ川間町のこと (↓70 P)

もう少しくわしく見ようと思えば、前々
項とその下の解説を見てください。

ここでもう一つ証拠をあげておきましよ
う。天正十三年(一五八五)のもので

「八代之内 石見屋敷 きたかいち……」

『兵庫県史』資料編 芥田家文書47

これには石見屋敷は八代の内だと、はっ
きり書いています。しかし石見屋敷という
地名は残っていません。学者は、城の東方
にあった「殿町」につづいている地だと推
定しています。すると石見屋敷は今の博物
館あたりなのでしょうか。

このあたりまで八代でしたが、姫路城が
できるとき堀や土塁で切られ坊主町や河間
町が城下町に組み入れられて、八代は南東
部が大きく切り取られてしまったと考えら
れます。

地名が広がったりせばまったりすること

をもう一つ。昭和五十一年の住居表示で「梅ヶ谷町」が誕生しました。くわしいことは中巻にゆずりますが、「八代宮前町」、「八代緑ヶ丘町」のように八代の文字をつけません。口絵の地図でわかるように、梅ヶ谷町の南半分は八代なのです。ここも八代だということも、やがては忘れられてしまうかもしれません。

八代六郎左衛門道慶

『播州巡考聞書』など古い文献によると、八代村を本拠にし、八代山に構えをつくっていた八代六郎左衛門という武士がいたことは間違いないようです。

しかし、はっきりしない部分も少なくありません。

例えば『播州古所伝聞志』という古記録には「姫路執人 八代六郎左衛門」と書いていますが「執人」とはどういう意味かはっきりしません。橋本政次

氏は「執事」と解し、「小寺氏の執事」と考えたようです。しかし「執」には「まもる」と云う意味もありますから、「姫路執人」すなわち「姫路を守る人」と解したほうが妥当ではないでしょうか。かつて小寺氏に従っていた六郎左衛門が、城主が黒田氏に変わるとその幕下になっているところを見てもそう考えたほうが筋が通ると思います。

また、『小寺政職家中記』という文献（専門家は資料性を疑問視しています）によると「八代村構居八代六郎左衛門と云者：中略：享祿四年より天文十四年まで姫路城留守居す」とありますが、橋本氏はこれを江戸時代の留守居と同様にみて、「城主の代理」と解釈されたうえで、のち姫路城主説に飛躍するのです。



▲姫路付近の古地図（部分図）

昭和12年に都路菱海（辻富治）が印刷して広く世にだしたもの。上はその地図の八代付近の部分図で、もとの図は飾磨の海岸まで書いてある。江戸時代末に誰かが書いていたのを万延元年、庭山武正が写したもの。

八代に関係のある地名のうち「梅カ谷」「東光寺」「大榎枯」の三つは庭山武正が書き加えた。

中 世 年 表

〈八代のできごと〉

〈社会のできごと〉

鎌倉時代

- 1288-1293 (正応年間) 伏見天皇が東光寺を離宮にしたという
 1293 (永仁1) 法灯国師が東光寺を中興したという
 1333 (元弘3) 御所の清水の水を後醍醐天皇に献じたという

後醍醐天皇 隠岐から
 京への途中 書写山へ

室町時代

- 1400 (応永7) このころ短羽矢明神を再興
 1429 (正長2)
 1430 (永享2)
 1440 (永享12) 男山構主 山野新藤次成明
 八代山構主 井手宗考沙弥 (八代の初見)
 1441 (嘉吉1) 以後男山構主 畑七十郎 (山名持豊の臣)
 1467 (応仁1)
 1484 (文明16) 2. 東光寺が山名氏の兵乱で焼ける
 1489 (延徳1) 八代村政所 新左衛門 八代村の初見 (東光寺文書)
 1500 (明応9) このころ南八代村の大歳社をまつる。
 1521 (大永1) 総社の祭りに八代村から60人参加。
 農長 室住平六
 1522 (大永2) 姫路執人八代六郎左衛門道慶が領中大歳社で国中
 祈願
 1532 (天文1) 芝崎山構居 構主 八代道慶
 このころ千代山構居構主 尾上十三郎 (小寺氏の配下)
 1555 (弘治1) 横須賀構居 構主 小寺主馬助

播磨にも一揆おこる
 守護赤松満祐が一揆を
 鎮圧
 関東で結城の乱

応仁の乱 始まる

総社三つ山祭

安土桃山時代

- 1576 (天正4)
 1578 (天正6)
 1579 (天正7)
 1580 (天正8)
 1583 (天正11)
 1585 (天正13)
 1595 (文禄4) 八代村高661石2斗7升8合
 代官 (政所) 芥田宗久

『府中めぐり』できる
 『国衙巡行考証』できる
 『めさまし草』できる
 羽柴秀吉 姫路城主になる
 羽柴秀長 姫路城主になる
 木下家定 姫路城主になる